論文概要書

初期華厳教学の形成とその展開

櫻井　唯

一　本論の目的

本学位請求論文で扱う智儼（六〇二～六六八）という人物は、唐代初期に活躍した学僧であり、伝統的な華厳宗の祖統説では、初祖の杜順（五五七～六四一）から法灯を継いだ第二祖に位置づけられる。このような師弟関係の系譜によって仏教史を捉える方法は古くより用いられてきたが、必ずしも歴史的事実と一致しない場合もあり、智儼を第二祖とする華厳宗の祖統説についても複数の学者による議論が昭和初期に起きている。その結果、伝記資料に智儼の師と伝えられる智正を初祖とする説、伝統説と同じく杜順を初祖とする説、智儼を初祖とする説が提唱された[1]。このように、初期華厳教学の研究は伝統的な教学的思考を意識し、それを批判的に乗り越えようとすることで発展してきた側面がある。

初期華厳教学の研究史においては、智儼の思想を後代の教学の枠組みから切り離して理解することが目指され、その思想の系譜については、開祖とされてきた杜順に代わって、当時大きな影響力を持っていた地論・摂論学派の存在が論じられるようになった[2]。つまり、華厳教学の成立背景は「杜順から智儼へ」という祖統説よりも、文献に即して直接的な影響をみることのできる「地論・摂論学派から智儼へ」という系譜によって理解されるようになったと言える。ただし、智儼には初期と後期とで思想の変化があり、同時代の他学派から影響を受けながらも、やがて独自の思想を打ち出してゆく。本研究では、智儼が何故、旧来の教学を乗り越え華厳教学を形成するに至ったのかという問題を検討することで、その思想的系譜についての従来の見方を再考する。そして、智儼を「華厳宗の祖師」としてではなく、一人の思想家として捉え、その思想の独創性とそれが当時の中国仏教において果たした役割を明らかにすることを目的とする。

二　各章の内容

本学位請求論文は三篇八章と訳註研究によって構成されている。その具体的内容は以下の通りである。

第一篇「智儼における華厳教学の形成」は、智儼の思想の淵源をたどることによって、中国仏教史上における華厳教学の成立背景を新たな観点から捉え直すことを目的としている。

第一章「智儼の著作に関する諸問題」では、智儼の思想内容の考察に先立って、主たる考察の対象である智儼の著作について、現行本の来歴やテキストの問題点を整理した。まず、智儼二十七歳のときの撰述と伝えられる『大方広仏華厳経捜玄分斉通智方軌』（以下、『捜玄記』）については、大正蔵のテキスト校訂に問題があることを指摘し、また続蔵本の底本と推定される延享二年刊本の識語を翻刻した。次に、玄奘帰朝後（六四五年以降）に成立した著作『華厳五十要問答』（以下、『五十要問答』）は、内容を五十三の問答に分ける現行本の他、表題通り五十の問答する異本がかつて存在した。この二系統の写本の関係は、おそらく後者がより古い形態であり、前者の現行本は朝鮮半島に由来するもので、智儼の弟子である法蔵（六四四～七一二）以降の教学によって問答を整理し直した可能性があることを論じた。この他、智儼の真撰として完全な形で残る『仏説金剛般若波羅蜜経略疏』（以下、『金剛般若経略疏』）と『華厳経内章門等雑孔目』（以下、『孔目章』）の前後関係について、前者が先に成立したと推測した。智儼の真撰と考えられる著作のうち、完全な形で残るのは以上の四部である。以下の各章では、主にこの四部の著作によって、智儼の生涯における思想の変遷を検討している。

第二章「隋唐における教体論の諸相」では、智儼の説く教体論が著作ごとに若干異なることに着目し、彼の生涯における思想の変遷を明らかにした。教体とは、言語によって表現された仏の

教えの本質・本体を意味する。敦煌から発見された地論・摂論学派文献によれば、隋代には『摂大乗論』の唯識思想を中心に据えつつ、様々に教体を論じていたことが確認できた。ところが唐代に入ると、教体を唯識と捉え、さらにその本体を真如とする唯識・真如教体説が主流となり、やがてこの説は華厳や法相学派にも取り込まれてゆく。本章では『摂大乗論』に基づいて唯識・真如教体を説いた最も早い例として、紀国寺慧浄（五七八～？）撰『法華経纘述』の存在を指摘した。以上のような隋唐の教体論の流れからみると、智儼初期の著作『捜玄記』における教体論は摂論学派の説の発展であり、「教えの本質に対する認識の深化」という、三性説に基づく階梯構造を有することが明らかになった。ただ、智儼の教体論は晩年の『孔目章』に至って大きく変容し、唯識・真如の上に、新たに「無尽」を教体とする説を提示している。この「無尽」という概念を『華厳経』の究極的な立場に据えたことこそ、華厳教学が他学派と一線を画する思想となった要因と言える。これを踏まえ、次章では智儼が何故、旧来の思想に留まらず、「無尽」を至高とする思想にたどり着いたのかを、教体論と同様の変化が生じている教判の問題を検討することで明確にしていく。

第三章「無尽の思想と華厳五教の成立」では華厳五教の成立について考察する。華厳五教とは、あらゆる仏説をその内容から小乗教・三乗始教・三乗終教・頓教・円教の五種に分類した教判論である。智儼が五教を成立させたのは、一般的には、最晩年の著作『孔目章』においてであると言われている。本章では智儼が『孔目章』でそれ以前の中国仏教の思想傾向を抽出して三乗教とし、その上に一乗円教を置くことで華厳五教の枠組みを成立させたことを論じた。この三乗教の中には、人法二空を知る「始教」、一切法の体を不空真如と認識する「終教」、そして一切の言説や形相を絶した「頓教」が含まれる。このうち始教と終教の立場は、三性・三無性から真如に至るという教体論と同じ階梯構造を持つ。この点だけをみれば、智儼は地論・摂論学派の唯識思想を華厳の「無尽」によって超克しようとしたと言えよう。しかし、この考え方だけでは初期の『捜玄記』で一乗に近いものと評されていた頓教が、『孔目章』では明確に三乗教という一段下の立場に位置づけられることを説明できない。ここに「地論・摂論学派から華厳教学へ」という系譜による理解の限界がある。そこで本論では、この智儼における思想の転換を「一元論から多元論へ」という新たな解釈によって捉え直した。つまり、晩年の智儼は、それ以前の中国仏教において有力であった如来蔵・仏性を背景とした一元論を三乗教とし、それを超克するものとして「無尽」の華厳一乗を提示したのである。智儼の初期と晩年とで頓教の位置付けが異なるのも、この教判の枠組みの転換によって説明できる。すなわち、一元的な存在によって満たされた世界を想定してみると、そこに他者は無く、また他との相対によって把握される自己も無い。華厳五教における頓教とは一切法を無相・不可説と捉える立場であり、これは要するに、相対的な認識を超えたある種の一元論なのである。それゆえ、一切法の本質を真如と捉える立場を三乗終教とした結果、同じく一元論の特徴を持つ頓教も三乗教の範疇に含まれることとなったと考えられる。

以上のように、智儼は初期の段階では他の学派等と同様に、あらゆる存在を一元的に捉える在り方を最上としていた。ところが、晩年に至ると、こうした一元論を三乗教とし、その上に華厳一乗の立場として『華厳経』に描かれる世界観に基づく「無尽」という多元論を提示する。このような思想の転換が生じたのは、玄奘三蔵の帰朝と法相唯識学派の勃興、そしてそれに伴って旧来の地論・摂論学派等の唯識思想が批判されたことに起因する。そして最終的に、智儼は対立する二者のいずれの側にも立つことなく、両者をともに超越し包摂する立場として、華厳一乗の無尽の思想を打ち出した。これにより、後の華厳教学の方向性は決定付けられたと言える。

第二篇「智儼の思想の継承と展開」においては、智儼の思想が後世においてどう解釈され、如何にして教学として発展していったのかという問題を取り上げる。

第四章「法蔵撰『華厳経探玄記』と『文義綱目』の成立過程」では、智儼の弟子である法蔵の

著作の成立過程を検討することで、法蔵自身の思想系統に対する意識に変化が生じていることを明らかにした。多くの先行研究では、法蔵撰『文義綱目』一巻は初期の著作であり、『華厳経探玄記』二十巻（以下、『探玄記）は後期の著作であって、後者には法蔵自身による加筆があったと考えられてきた。本章では、『文義綱目』のテキストの大部分が『探玄記』巻一～五までのテキストと一致することから、両テキストの比較を行った。その結果、『探玄記』巻二以降は『文義綱目』とほとんど同じ文言が多いのに対し、『探玄記』巻一との対応箇所のみ、表現や思想内容に隔たりがあることが判明した。また、『文義綱目』には『探玄記』以前に成立したとする従来の説では説明できない記述も存在する。そこで、本章では『探玄記』には現行本の元となるものが存在し、その執筆初期に講経のために必要な部分を抜粋して作ったのが『文義綱目』である可能性を論じた。現行の『探玄記』には主に巻一の部分について法蔵自身が後年になってから改稿を行ったと考えられる。法蔵が『探玄記』を改稿するに至ったのは、第一にはその間に生じた思想の進展を反映させるためであろう。ただし、仔細に見ていけば、法蔵の先徳に対する態度にも変化が現れている。これについては、改稿が行われたと目される時期が東山法門の台頭と重なるため、法蔵は祖統を重んずる彼らに影響を受け、自身の思想的源流を意識するようになり、意図的に地論学派と華厳教学の連続性を否定しようとした可能性がある。

第五章「華厳教学における同体門・異体門の形成」では、法蔵の『五教章』等で明らかにされる同体門・異体門の相即・相入という思想について、その思想の淵源と形成過程を探った。同体門・異体門は十玄門（十玄縁起）と呼ばれる教理を構成する要素の一つであり、十玄門は法界縁起を明らかにするものと言われてきた。この問題を扱う理由は、前述の「一元論から多元論へ」という転換が法界の構造にも及んでいるためである。それまで一個の閉じた宇宙と捉えられてきた法界が、個の内にも世界の外にも無限に広がる重層的な構造を持つと考えられるようになったことで、法界縁起の思想にも変容が生じた。すなわち、智儼の『搜玄記』巻三上における法界縁起説は、如来蔵たる「一心」を前提とする[3]。しかし、法蔵が『五教章』において法界縁起を明らかにするものとして示す十玄縁起無礙法門の思想は、『搜玄記』の説とは大きく異なっている。この十玄門を構成する重要な教理である同体門・異体門の相即・相入は、もとを辿れば智儼が説いたとされる十銭（十数）の譬喩に由来する。本章では、智儼の諸著作、および義湘撰『一乗法界図』、伝智儼述『一乗十玄門』[4]、法蔵撰『五教章』と『文義綱目』における同体門・異体門の説示を検討し、その展開を考察した。そして、著者問題の存する『一乗十玄門』の説について、義湘の『一乗法界図』に影響を受け、『五教章』の説の前身となっている可能性を論じた。智儼によって示された無尽の思想を解明し、重層的な法界の構造を具体的に説明することは、彼の弟子たちに残された課題であったと考えられる。

第六章「南都諸宗の草木成仏論」では、日本における智儼・法蔵説の受容の一端を、草木成仏の側面から見ていく。平安時代の天台宗の学僧、安然の『草木成仏私記』に引用される南都諸宗の草木成仏論を取り上げ、中国から日本への伝来とそれに伴う思想の変化について検討した。特に日本の草木成仏論の文脈で重要な役割を担ったのは、日本の法相宗が用いた自依心・他依心という教理である。法相宗は他宗を批判する際にこの概念を用いていたと考えられ、日本の華厳宗や天台宗の草木成仏論にその影響が見える。しかしながら、仏を能同、草木を所同と固定的に捉える日本華厳宗の説は、必ずしも法蔵の思想と一致せず、日本法相宗の説に影響を受けたものと考えられる。このことから、日本における草木成仏論が中国とは異なる発展を遂げたのには、両国における宗派の関係性の相違があったと結論づけた。

第三篇「唐代初期仏教の一側面」は、これまであまり注目されてこなかった長耳三蔵と紀国寺慧浄という人物の中国仏教史における位置を探るものである。第二章で論じた通り、慧浄は智儼に先立って唯識・真如教体を説いた。また、長耳三蔵は慧浄がその学説を引用する異国僧

であり、慧浄の思想系譜を探る上で重要な人物である。

第七章「長耳三蔵の思想とその受容」では、唐代以降の様々な学僧によってその学説が引用されながら、素性のはっきりしない長耳三蔵という異国僧を取り上げ、その思想が継受されてきた過程を検討した。長耳三蔵の学説を引用する文献は、大きく四つの系統に分類することができる。そのうち、最も流布した長耳三蔵説を引用する文献の中で最も早いものとして、慧浄の『法華経纘述』の存在を指摘した。ただし、時代が下るとその引用元は忘れ去られ、孫引きの繰り返しによって伝えられていったと考えられる。そして次第に長耳三蔵の学説は本来の意味を離れ、自説を補強するための権威として用いられるようになってゆく。また、長耳三蔵は西方の異国僧と考えられてきたが、その学説の内容には中国の三論学派やその周辺の思想に近いものが含まれることを指摘した。長耳三蔵説を多数引用する慧浄は、出家して間もなく北地において大論学派に学んだとされ、この大論学派は三論学派に近い思想を持っていたと考えられている。以上により、長耳三蔵の学説とされるものは、北地の大論学派の中で重要視され伝えられてきた可能性が高いと言える。

第八章「紀国寺慧浄の著作と思想」では、著作や伝記資料等から慧浄の思想傾向を探った。慧浄撰述の可能性がある文献は二十四部確認できるが、その多くは敦煌文書から発見されている。そのため、先行研究では個別の文献の検討が主に行われ、その思想の全体像は明らかになっていないと言える。また、慧浄の著作とされるものの中には、散逸し目録に書名のみ残るものや、撰号を欠く等の理由により慧浄の著作と断定できないものもある。このような研究状況を踏まえ、本章では慧浄の著作に関する先行研究を総合し、その全てについて検討を行った。結果として、慧浄の思想には、初期に学んだ北地の大論学派の思想の影響が晩年まで及んでいること、また、限定的ではあるが、摂論学派や法相学派といった中国唯識教学を取り入れていることが確認できた。以上の検討により、慧浄は唐代初期の中国仏教思潮としての「如来蔵思想」の担い手の一人であったと推測した。

最後に、訳註研究として、智儼撰『金剛般若経略疏』の科段、および冒頭から序分までの箇所に註釈および書き下しを付した。

三　結論

本学位請求論文では、智儼の華厳五教の成立に関連する問題から出発して、華厳教学の形成を中国仏教史の観点から考察した。華厳教学の成立背景を探る研究史においては、伝統的な祖統説に基づく初祖杜順の思想的影響が否定されると、『華厳経伝記』等で智儼の師と伝えられる法常や智正の存在が注目された。そして、敦煌文献の整理が進んだことにより、具体的な地論・摂論学派文献から智儼の思想への展開が論じられるようになった。しかし、智儼の思想には、「地論・摂論学派から華厳教学へ」という従来の研究の枠組みだけでは捉えきれない多様性があることも事実である。本論の特色は、晩年の智儼における華厳教学の確立を、当時の中国仏教の主流であった如来蔵・仏性思想の超克、すなわち「一元論から多元論へ」の展開と捉えたことにある。

智儼の弟子である法蔵は、智儼の諸著作を評して「新奇を剖曜す[5]」、つまり独創的な思想を明らかにしているとした。これは単なる文飾ではなく、智儼の思想が同時代の誰とも異なると法蔵の目には写ったのであろう。やがて東アジアの各国で宗派として確立していく華厳教学の原点はここにあると言える。

[1] 華厳宗の初祖をめぐる論争の経過については、吉津宜英『華厳禅の思想史的研究』（大東出版社、一九八五）一七～一八頁（註二～註四）に詳しい。

[2] 智儼の思想を中心に扱った研究は、木村清孝『初期中国華厳思想の研究』（春秋社、一九七七）に始まり、その後、石井公成『華厳思想の研究』（春秋社、一九九六）、大竹晋『唯識説を中心とした初期華厳教学の研究――智儼・義湘から法蔵へ』（大蔵出版、二〇〇七）、織田顕祐『華厳教学成立論』（法蔵館、二〇一七）等が発表された。

[3] 智儼撰『捜玄記』巻三下（大正三五・六二頁下～六三頁下）。『捜玄記』の浄法縁起門（菩提浄法）とは、法界の在り方を修生（修行によって成仏すること）と本有（本来的に備わる悟りの可能性）の循環と捉える側面である。また、染法縁起門（凡夫染法）は「縁起一心門」と「依持一心門」から構成され、衆生の生きる迷いの世界は阿梨耶識より生じ、維持されているとみる側面を指す。

[4] 『一乗十玄門』は「智儼述、承杜順和尚説」という撰号を有することから、伝統的には智儼の著作と考えられてきたが、近代以降の研究では多くの研究者によって偽撰の可能性が論じられている。『一乗十玄門』の審議問題に関する先行研究は、石井公成『華厳思想の研究』第二章・第三節「『一乗十玄門』の諸問題」にまとめられている。

[5] 法蔵撰『華厳経伝記』巻三・智儼伝（大正五一・一六四頁上）。